



TITLE:

貨幣自體の限界效用(上)

AUTHOR(S):

正井, 敬次

CITATION:

正井, 敬次. 貨幣自體の限界效用(上). 經濟論叢 1935, 40(2): 458-466

ISSUE DATE:

1935-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130554>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號貳第 卷十四第

行發日一月二年十和昭

論 叢

第三史觀の概念……………

文學博士 米田庄太郎

地方間課税に於ける住所對財源……………

法學博士 神戸正雄

地方財政調整指數……………

經濟學博士 汐見三郎

時 論

増税は景氣の芽を摘むか……………

文學博士 高田保馬

貿易統制としての爲替清算制……………

經濟學博士 谷口吉彦

研 究

フランスの獨立償還金庫に就いて……………

經濟學士 松岡孝兒

貨幣自體の限界效用……………

法學士 正井敬次

說 苑

公債制度の社會的條件に就て……………

經濟學士 島 恭彦

小農經濟理論より見たる地代……………

經濟學士 山岡亮一

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

貨幣自體の限界効用（上）

正井敬次

經濟論叢第三十九卷第三號に於ける高田博士の「貨幣の將來効用について」といふ論文は、私によれば、それは、貨幣價值の一般理論に向つて若干の反省を示唆する所の有意義なる研究である。私は、貨幣について若し効用が論じ得らるゝものとするならば、右に博士の云はるゝ貨幣の將來効用こそが即ち貨幣の効用であり、而してそれがまた、價格の要因としての主觀的貨幣價值又は貨幣の限界効用に對して基礎をなす貨幣の効用であるのではないか、と云ふ考を從來よりしてもつてゐた。是に於てか、右の如き効用に基く貨幣の限界効用を茲に貨幣自體の限界効用と稱し、而してそれについて少しく所懷を述べてみたいと考へる。

一

今日一般には、貨幣自體の効用といふ概念が認容せられてゐない。貨幣の効用については、「貨幣はそれ自身に効用をもたぬ、それはたゞ、それによつて買ひ得らるゝものゝ効用をもつばかりである、即ち貨幣の効用は間接効用と云はるものたるに過ぎない」といふが如き説明がもはや固定的のものとなつておる。貨幣數量説又は所得數量説の論者に於ては元より、貨幣について主觀價值説をとる澳大利學派に於てもまた然りである。かくして高田博士にありてもまた、貨幣の効用が論ぜらるゝ場合、右の如き貨幣効用の概念が前提として認められておる。¹⁾

1) 高田博士、「貨幣の將來効用について」經濟論叢、第三十九卷、第三號、二三頁參照。

今私は、右の定説をまづ根本的に疑つてみる。即ち思ふ、貨幣について純粹に交換的 (katallaktisch) かつ個別經濟的の考を徹底せしむるとき、而してまた、貨幣經濟に於ける效用を自然經濟に於ける效用と區別し、貨幣經濟に於ては自然的效用又は使用價值が問題とせられずして、總ての財について、價格を前提とする社會的效用とそれに基く利用價值 (高田博士に於ける免價價值) が交換價值以外に於ては問題とせらるゝものと見る場合、貨幣の效用は必ずしも定説の如くなるを得ないのではなからふかと。

蓋、私見によれば、フヒッシャー、ミウムペーター等によつて代表せらるゝ均衡理論的貨幣價值説論者には、彼等が貨幣經濟を根本的には交換經濟と見ながら、貨幣の本質について特に非交換的 (akattallaktisch) の見方をとるといふ、方法上の不調和が存在するものゝ如くに思はれる。次にウィイザア―其他の澳太利學派には、彼等が元々貨幣經濟又は社會經濟に於ける價值を、使用價值以外のものとして説くに拘らず、^{註一}貨幣價值を論する場合とかく使用價值の概念につきまとわれてゐるの嫌ひがある。即ち澳太利學派に於ては、貨幣は主觀的交換價值をもつも主觀的使用價值をもたぬ。貨幣の價值は買はるゝ貨物に於て豫想せられたる使用價值に依存するといふ考が、貨幣價值の説明に於て前提とせられておる。併しながら今、貨幣經濟に於ける個別經濟は社會的に經濟する個人の經濟であつて、それは所謂孤立經濟ではなくして部分的なる社會經濟であるとき、貨幣經濟にては主觀的使用價值なるものは總ての財について問題とせられず、たゞ主

觀的交換價值が利用價值其他の名稱の下に自然經濟に於ける使用價值に代るものとして、客觀的交換價值の外に一般の財に於て存在するものと見るが、貨幣經濟の正しき見方ではないであらうか。

註一 例へば Böhm-Bawerk, Positive Theorie des Kapitals, S. 159, 161, 204. Wieser, Theorie, S. 106. の貨幣經濟に於ける價值の概念。Wieser, Der natürliche Werth, S. 59 ff. に於ける流通價值 (Verkehrswert) の如きは確かに使用價值の概念を離れしものである。

私は、貨幣はそれ自身に效用をもたぬ、と云ふ考は、非交換經濟的かつ團體經濟的の觀念であり、同時にそれは自然經濟の理論をそのまゝ貨幣經濟に於て用ひんとする考であると思ふ。交換的個別的の見地に於て貨幣の效用を考ふる場合、其處に商品の效用と同じ意味に於ける貨幣の效用が存在なくてはならぬ。それは使用價值的なる商品又は貨幣の效用ではなくして、貨幣經濟的なる商品又は貨幣の效用である。而して私によれば此意味の效用について初めて貨幣自體の限界効用が論じ得られる。蓋、純粹主觀的意味の限界効用は、物それ自體に對する欲望(効用)と物の數量との質的並に量的の二要素に基きて成立する。是に於てか、それ自體の效用が論じ得られざるものについては限界効用は問題とせられ得ない。逆に、貨幣について限界効用が説かるゝ限り貨幣自體の效用が前提とせられなければならぬ。

右の如き見地に於て、私は高田博士の謂はるゝ貨幣の將來効用が貨幣自體の效用であり、而して貨幣の限界効用又は貨幣の價值とは、右の如き貨幣效用を質的要素(數量化し得らるゝ質的要素)とし、

次に貨幣存在量を量的要素とし、此兩者の關係よりして割り出さるゝ一の量がそれであると考へる。然らば貨幣の將來效用と現在效用との關係は如何であるか、此點について、私は右の兩者を共に貨幣の效用と見るは誤ではないかと考へる。即ち思ふ、貨幣は間接的效用をもつのみである、との前提に於ては、貨幣の將來效用といふ概念は成立せないのではないかと。蓋、例へば商品の値下りを豫想して買控へをなす場合の準備貨幣については、間接的效用に基く所の貨幣の將來效用が論じ得らるゝが如くである。併しながら其他種々の意味に於て保有せらるゝ貨幣については、その將來效用が何に基きて判斷せらるゝか不明である。かくして、私は、準備貨幣（貯蓄貨幣と云ふも同じ）については一般に間接的效用が問題とせられずして、貨幣自體の效用が思量せらるゝものと考へる。右の如く見るとき、私に於ては、間接的效用の概念に出發する者は貨幣の效用を純粹にたゞ反射的の效用とのみ解することが、而して反對に貨幣自體の效用なるものを認むる者は所謂貨幣の將來效用のみを貨幣の效用と看做することが合理的であると思はれる。

二

右の如く、貨幣の間接的效用は貨幣の效用ではなく貨幣の效用とは貨幣自體の效用のことである、とする場合、然らば謂ふ所の貨幣效用は之を量に於て示すときは果して如何なるものであるか。且また、斯の如き效用を基礎とする所の貨幣の限界效用とは如何なるものであるか。問題の解決に先ちて、私は限界效用理論に於ける效用と欲望との關係を決定しておくことが必要である

と考へる。

ベーム・バウエルクによつては欲望の重要性 (Wichtigkeit des Bedürfnisses) が效用と見られてゐるのであるが、欲望の重要性又は度合は之を實際的な量に於て示すときは欲望せらるゝ財の數量であるとするの他はない。是に於てか、或人が或物の何程を欲するやの欲望の數量が其人に於ける其物の效用の量を示すものと云つてよい。ワルラスに於ける效用量 (utilité extensive) の概念が正にそれである。即ちワルラスによれば、若し何等かの對價を問題とせないならば人が欲望するであらふ所の財の量が其財の效用量である。右の如くにして私は、效用を量的のものと見る場合、それは欲望せらるゝ財の量即ち欲望量によつて現はされる、といふことが吾々の限界効用理論に於て前提とせられ得るものと考へる。

さて、一物の限界効用は其物に對する欲望量 (Bedarf) と其物の存在量 (Vorrat) との關係によつて決定せられる、といふことが一般に認められる。この前提を承認するときは、貨幣についてまた、その限界効用は貨幣欲望量 (Geldbedarf) と貨幣存在量 (Geldvorrat) との關係によつて決定せらるゝものと云つて差支がない。然るに既に言ふ所により貨幣欲望量は即ち貨幣效用量である。然らば貨幣欲望量 (一般に貨幣需要と云はれる) 及び貨幣存在量とは如何なるものであるか。

一定の個人に於ける貨幣存在量とは、簡單に云へば一定期間に於て其人の得る所の貨幣所得の量である。併しそれは一般に考へらるゝ所得とは少しく其範圍を異にする。即ち私は、貨幣存在量とは、一定の經濟期間に於て豫定せられたる貨幣收入と貨物購買以外に於て豫定せられたる貨

幣支出との差額たる貨幣の純收入であるとする。右の場合、豫定的の貯金例へば積立貯金、又は生命保険料等の如きは別であるが、自由なる貯金又は準備金は當然に貨幣存在量の中に含まるゝものと見る。即ち準備金は要するに、時としては多く時としては少く手許に保留せらるゝ所の節約貨幣である。右の如きが私に於ける貨幣存在量の意義であるが、次に所得數量説に於ける貨幣存在量の範圍は右に私の考ふる所よりも更に狹少である。即ちウィイザア³⁾が、貨幣價值は交換によつて決定せらるゝが故に問題とすべき貨幣の數量は交換に現はれたる貨幣の數量でなければならぬ⁴⁾と云ふ場合、貨幣存在量の意味は消費貨物の購買に向つて用ひらるゝ貨幣量のことであつて、その中よりは租税・贈與・預金等に向つての貨幣が除外せられる。またシユムペーターの基礎方程式に於ける D は所得でありまた貨幣存在量であるが、それは純粹に消費貨物の購買に向つての貨幣量である。此等の説に従ふ所のヒルシュに於ても貨幣存在量の意味は同様に解決せられる。高田博士が購入餘力と云はるゝものもまた所得説に於ける貨幣存在量と同一のものと見てよいであらふか。

所得説の論者と私とに於ける貨幣存在量の意義の相違は、時によりて不同なる準備金をその中に含ましむるか否かの點である。併し此點は重要である。蓋、私によれば貨幣存在量はその構成が問題とせられつゝある價格に對しては獨立せる一の絶對量である、之に反して貨幣欲望量は當面の價格に對して相對的關係に在る所の量である。この相對量としての貨幣欲望が絶對量としての貨幣存在量に制限せらるゝ所に、價格に獨立せる一の貨幣の價值が成立する。所得説は貨幣

3) Wieser, Geldwert und seine Veränderungen, S. 515.

4) Hirsch, Grenznutzentheorie und Geldwerttheorie, S. 28 ff.

存在量をして價格に對する相對量たらしめる、從つてこの說による貨幣の價值は價格と相表裏するものたらざるを得ない。

次に貨幣欲望量の意味は如何と云ふに、私はそれを以て節約貨幣の量であるとする。節約貨幣は一時的なる手持金と預金とを含む、併しその何れたるを問はず貨幣存在量の中の貨物の購買に用ひられざる部分がそれである。蓋、右の如き貨幣欲望の概念は、商品に對する評價とは獨立に、「貨幣自體」(monnaie elle-même)に對する評價が存在し得るとなすの考にその基礎をもつ。而して私によれば、貨幣欲望に關する右の如き見解は、ミーゼス、アフタリオン、カアバー等の諸教授によつても亦支持せらるゝものと考へる。

ミーゼスは、貨幣存在量を現實なる手持金の意味に、而して貨幣欲望を總ての支拂に向つての貨幣の必要と云ふ意味に見ておる。併し貯蓄のための貨幣の必要はミーゼスに於ても明かに貨幣欲望であるとせられる。即ち彼は、租税、債務、贈與等の總ての目的に向つて貨幣を手許に有することの必要からして、人は彼のもつ手許金の充分なるか否かを判斷する、と云ふ⁶⁾。即ちこれ貨幣それ自體に關する評價の如何が手許金の増減となつて現はれることを語るものである。

アフタリオンは、貨幣欲望を欲望の結果としての量的のものとしては示してをらぬ。併しながら同教授の貨幣價值説は其精神に於て私の見解に最もよく一致する。即ち教授はまづ貨幣評價の獨立性を主張する⁵⁾。次に教授は個人的貨幣價值の構成を説いて、各個人に於ける貨幣の價值は所得の最後の貨幣單位にかれが期待(attend)する所の欲望満足に依存するとし、從つて貨幣價值の

5) Aftalion, Monnaie, prix et change, p. 206 参照

6) Mises, Theorie des Geldes, S. 118.

7) Aftalion, op. cit., pp. 206, 207.

基礎には量的と質的との二箇の要素が存在すると云ふ。⁸⁾ 量的要素はアフタリオンに於ても同様に所得である、然らば質的要素はと云へば、教授に於ては、結局に於て其主たるものは、貨幣の將來價值に對する豫想である。⁹⁾ 但、教授に於ては質的要素は純粹に心理的のものたるに止つておる、併し吾々はそれをその結果に現はれたる量に於て見なければならぬ。然らば教授の所謂貨幣の將來價值の豫想は何に於て現はれるかと云ふに、それは節約貨幣又は準備貨幣に於てあると云つて誤はない。かくして、アフタリオン教授に於ける貨幣欲望は、貨幣の將來價值の豫想によつて支配せらるゝ所の準備貨幣の量であると見て差支がない。

次に、最近カーパーは「貨幣の需要」を説いて、¹⁰⁾ それが貨幣そのものに對する欲望に原因することを述べ、而して、賣らるゝ商品が貨幣の需要であるとする。エス・ミルに於けるが如き貨幣需要の觀念と、並に、買はんとする商品に對する欲望が貨幣欲望であるとする、近時の所得數量說に於けるが如き貨幣欲望の見方とを排斥しておる。而して結局、貨幣に對する欲望は、貨幣が物の購買に關する最善の方便であることと並にその價值保有者としての效用とに基くものなるが故に、貨幣に對する欲望は要するに貯蓄に對する欲望に等しい、と云ふ。右の如くにして、カーパーに於ける貨幣欲望の概念は私に於けるそれと全く相等しきものである。

右の如きが吾人に於ける貨幣欲望と貨幣存在量との意義である。然らば今、初に云ふが如く貨幣の限界効用は貨幣欲望と貨幣存在量との關係によつて決定せられるとなす場合、其關係とは如何なる關係であるかと云ふに、それは貨幣欲望量を貨幣存在量を以て除するといふ分數の關係で

8) Aftalion, op. cit., p. 234.

9) Aftalion, op. cit., pp. 235, 236.

10) Carver, The demand for money, Economic Journal, June, 1934, p. 189.

ある。蓋、限界効用學說に於ては一般に欲望又は効用が基本的のものと見られ財量が條件的のものと見らるゝが故である。かくして、今、貨幣存在量を以て簡單に所得であるとし、次に貨幣欲望量を所得の中よりの貯蓄貨幣の量と見るときは、私によれば貨幣（所得）の限界効用は $\frac{1}{10}$ によつて示さるゝ所の一の量である。例へば一日の所得十圓なる人が一圓を貯蓄するときは其日其人に於ける所得の限界効用は $\frac{1}{10}$ である。但、元より其 $\frac{1}{10}$ といふ數はそれ自體に於て又は單獨にては何等の意味をもたぬ、それは例へば昨日の $\frac{2}{10}$ 、一昨日の $\frac{3}{10}$ と云ふが如き同様の意味の數との比較に於てのみ初めて其意義をもつ。蓋、右の場合、既に云ふ所によりて貯蓄即ち貨幣欲望量は貨幣又は所得の効用量を現はす、是に於てか、即ち右の分數は所得に於ける貨幣一單位の効用を示すこととなる。

右の場合、若し貯蓄せられたる貨幣量を貨幣存在量とし而してその全部効用を考ふるものとすれば、即ち例へば三圓に於ける初の一圓の効用を x とし次の一圓の効用を x' とし最後の一圓の効用を x'' とするときは、全部効用は $x+x'+x''$ であり、而してその貯蓄貨幣の限界効用度は $\frac{x''}{1}$ である。右の如きが限界効用理論の普通の考へ方である。併しながら私が $\frac{x''}{1}$ を以て所得の限界効用と見る場合、その考へ方は次の如くである。即ち一日十圓の貨幣支配力（存在量）をもつ者が最後に參圓を貯存するとき、三といふ數がかれに於ける貨幣自體に對する欲望又は貨幣の効用の大きさを現はす、即ち十圓の存在量をもつ資格に於ける其人の貨幣効用が三である、従つて三といふ數は其場合所得に對する貨幣自體の効用の大きさを現はすものである、と。（未完）